Huzita, M.: On the food-habit of few *Opiliones*.

ザトウムシの食性に就て

藤　田　　衛

福井縣坂井郡鶉村

〔昭和十一年九月五日受領〕

ザトウムシの食性に關する邦文の文獻は，絶無と思はれる位少なく，只一つの貴重な資料として，アカサビザトウムシの食性に就き，植村利夫氏が，紀州動植物 Vol. ii, no. 2: pp. 19—21 (1935) に報告されてゐるのみで，甚だ遺憾であると思はれるが，又，或る見方から眺むれば，我々同好の樂しみであるとも云へる。幸小生は今夏の數度の採集旅行先に於て，二三のザトウムシの食性を拾ひ上げたので，以下其の事に就て略記する。本稿を作成に當り，種々御指導を仰いで居る，岸田久吉先生及び植村利夫氏に對して，感謝の意を表する次第である。

A. **メスナガザトウムシの食性。**

本年(1936)七月十九日，小生と同好の士四人が，福井縣坂井郡本鄕村國見山方面に生物採集の折，同村大字清水平地籍の山道に，枳技にされた直徑2.5cm 內外，長さ 70cm 餘の松が，横たへられてあつた，幹には成熟しきつた粘菌 *Myxomycetes* (變形菌ともいふ) *Stemonitis fusca* Roth が群生してゐる。何か裏側に珍物でも居りはせないかと思つて，靜かに起して見た所，以外にもメスナガザトウムシ *Melanopa tibialis* Kishida の二頭が向き合つて，白色を帶びた粘菌の *Plasmodium* 卽ち原形體を盛に食ひつゝあつた。この原形體の面積は約 9 平方糎。小生はじつと觀てゐたが同好の者は，ずつと先へ行つてしまつたやう

なので二頭を採集した。原形體は僅に食つてゐたのみであつた。

この原形體は，色相及び附近に群生してゐた粘菌から *Stemonitis fusca* Roth ではないだらうかと愚考するのである。

粘菌なるものは，今日の所植物なるか動物なるか判定し難い。併も世界的に分布の廣いコスモポリタン式の生物である。且原形體は，多汁で養分をも多分に含んで居るらしいので，ザトウムシの食性上，甚だ面白いものだと想つたので，こゝに食性の一つとして，報告して置くのである。

B. コハザトウムシ・ヒトハリザトウムシ・サミダレザトウムシの食性。

本年八月一日より六日迄六日間，小生大野中學校，本多，吉田兩教諭等の大野奥地の地質，生物調査の一行に參加し，蜘蛛採集に赴いた。旅行中天候惡く期待に反した事は殘念千萬であつたが，ザトウムシ類の食性の觀察をなし得たことは何よりの樂しい土産であつた。

a. 第三日目，八月三日，和田山（和田池ありてモリアヲガヘルの棲息地，天然記念物指定に申請せんと調査中）にて，コハザトウムシ *Nelima valida* Kishida がチマキザサ *Sasa paniculata* Makino et Shibata の葉上で小さい甲蟲の腹部を食つてゐる。甲蟲を採つて調べると，體長 12mm 餘のゴミムシの一種 *Anisodacty sp.* らしい。全く內臟は食ひ盡されて，翅鞘の右はとれてゐる。

b. 第四日目の八月四日，石徹白（イシトシロ）から五箇村に出る途中，橋立峠にて，ヒトハリザトウムシ *Gagrella japonica* Roewer がフクワウサウ *Prenanthes acerifolia* Benth の葉上でシヤクトリガの一種 *Acidalia sp.* の腹部を食つてゐたので，顏をつき出して覗るや否や，ヒトハリザトウムシは，驚威を感じてか，其の場に獲物を捨てゝ，一目散に逃げ去つた。取殘された蛾を手に採つて覗れば，腹部はすつかり食ひ盡されてしまつてゐる。

峠を下りて溪谷に至ると，今度は，アカソ *Boehmeria tricuspis* Makino の葉上で，ヒメザトウムシ *Bienia delicata* Kishida が小さな蛾を食つてゐる。小生は先を急ぐので，ザトウムシも蛾も採集して溪谷を下りて行つた。後で蛾

を調べて見ると，フタスヂシマメイガ *Herculia glaucinalis* L. ？らしい。やはり腹部が食はれ居た。

c. 以上小生が觀察した範圍內では，ザトウムシは昆蟲(成蟲)の腹部を好んで食ふらしく，又食ふ時には，昆蟲の頭部をザトウムシの前方に向けて卽ち向き合つて食ふと云ふ事も特に記して置きたい。

尙福井縣のザトウムシ類に關しては，稿を新にして記したいと思つてゐる。

(昭和十一年八月二十三日認)

KOMATU, T. On the habit of *Myrmarachne innermichelis* Boesenberg et Strand.

クロアリグモの習性

小　松　敏　宏

長野縣諏訪郡北山村

(昭和十一年八月三十日受領)

今でも深い印象として殘つてゐるが，記錄に據ると昭和五年六月三日，長野市（佛都として著名な）閑靜な下宿屋の裏庭で始めてこの蜘蛛の活潑な動作を觀察したのであつた。

庭の一隅に南天の藪があり，向ひに傾いた榴の老木がある。榴の長く差延べた枝が低く枝垂れて，南天と一米ばかりの間隔をなしてゐる。

顏を洗つて浮圖顏を上げた時，日の光にチラリと輝く南天から榴の枝へかけての遊糸が目についた。南天の葉の上では丁度クロアリグモ *Myrmarachne innermichelis* Boesenberg et Strand が流した糸を手繰つてゐる時であつた。